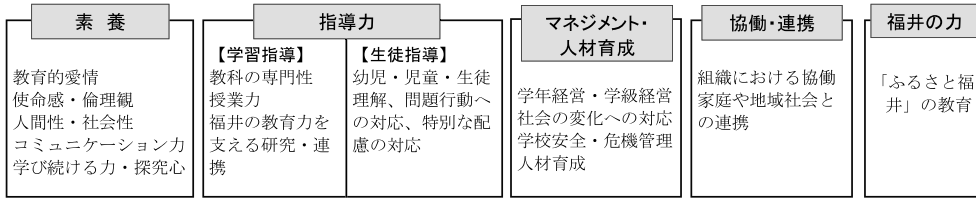


学び続ける教員を支えるための研修

— 教員育成指標を活かした研修にするために —

教職研修センター 教員研修課

教員研修体系(基本研修・職務研修)と教員育成指標

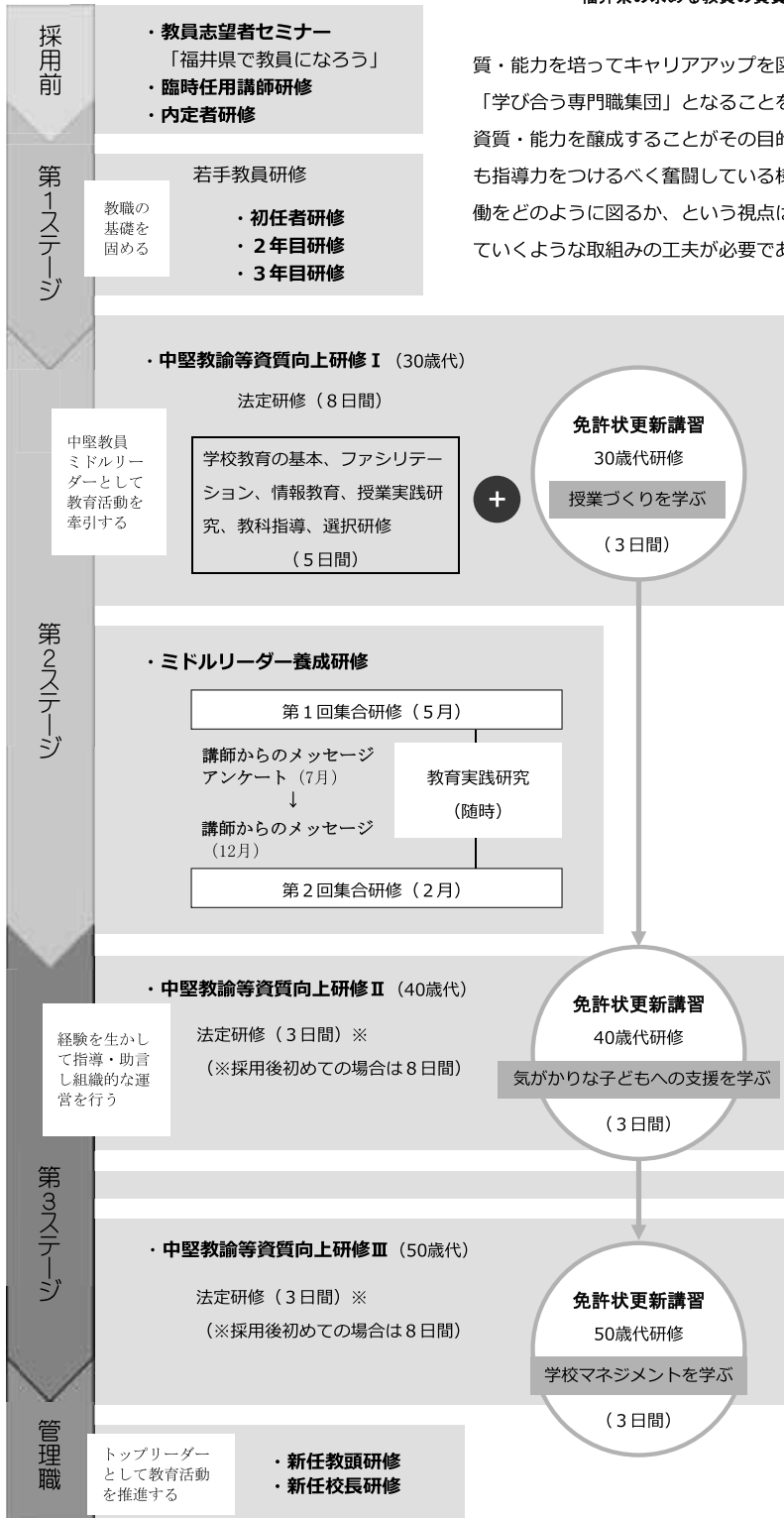
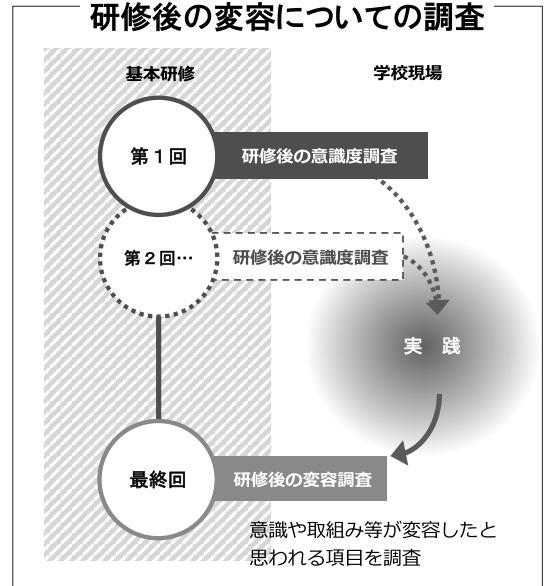


福井県の求める教員の資質能力

今年度は、初任者研修をはじめとする基本研修においても常に「教員育成指標は、教員自身のためにある」ことを呼びかけ、担当からの説明であったり、研修直後のアンケートや長い研修期間全体を振り返って自己の姿容を尋ねたりして、教員育成指標についての意識づけを図った。教員が資

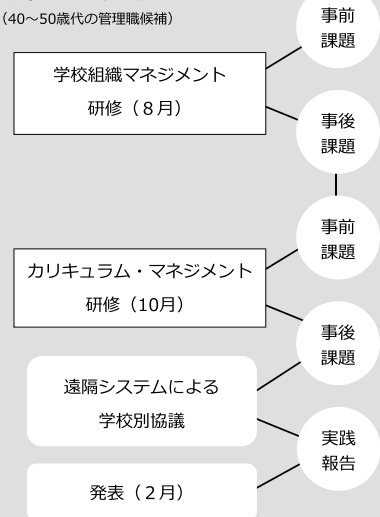
質・能力を培ってキャリアアップを図るなどといった個人のレベルに留まらず、学校の教員集団全体が「学び合う専門職集団」となることを目指し、そのような集団の中でなければ養うことができない教員の資質・能力を醸成することがその目的である。結果としては、先生方が子どもたちを指導する中で、自らも指導力をつけるべく奮闘している様子が伺える一方で、学校経営全体をとらえることや他の教員との協働をどのように図るか、という視点はまだ乏しいことが判った。今後も教員育成指標が学校現場に根付いていくような取組みの工夫が必要である。

教員育成指標の意識度と研修後の変容についての調査



・マネジメント研修

(40~50歳代の管理職候補)



学校現場における学力調査の活用推進に向けて（Ⅲ）

－学力向上に向けた学力調査の活用－

教科研究センター 小中学校教科研究課 学力向上グループ

I はじめに

「福井型学力向上サイクル」を確立させ、県内小中学校の児童・生徒の学力向上を目指す

【主な取組み】(H26年度～)

- 学力調査（SASA・全国学調）、訪問研修に関する調査・研究
- SASAの調査問題・質問紙・学校質問紙の作成、調査結果分析、分析資料資料・報告書の作成
- 全国学調の調査結果分析、分析資料作成
- 学力調査の活用に関する訪問研修の実施



II 学校現場における学力調査の活用について

1 学力調査とは

学力調査の目的

- 児童・生徒の学力や学習状況の把握
- 授業改善に役立てる

調査問題には、これから児童・生徒が生きる時代に必要な力についてのメッセージが込められている

2 学力調査を学力向上に生かすために

(1) 調査問題を知る

調査問題を分析して、調査問題に込められたメッセージを読み取る

学校全体での取組みが必要

(2) 調査結果の分析と共有

自校採点をし、解答用紙の誤答分析から児童・生徒の“つまずき”を知り、課題を共有しよう

(3) 授業改善

児童・生徒の“つまずき”から、実態に応じた指導につなげよう

授業改善には県や国から発信される情報も活用しよう

(4) 訪問研修の活用

調査結果の分析をふまえた授業改善について、学校現場を支援する訪問研修を活用しよう

III SASAを介してのメッセージ

1 問題設計および作成と授業づくり

SASAの問題設計・作問の6つのポイント

問題設計＝授業設計
調査問題＝教材

2 これから求められる学力を培う授業づくり

小学校各教科（国語、社会、算数、理科）の「Cチャレンジ問題」を通して、今後の授業づくりの方向性について示す

- (1) 出題の意図、
- (2) 調査結果分析、
- (3) 総合的な学力を育むための授業づくり

IV 今後の方向性

1 成果と課題

- (成果)
- ・SASA全県調査結果データの迅速な情報発信（課題）
- ・SASA「報告書」の活用推進
- ・訪問研修の活用推進

2 次年度に向けて

新学習指導要領実施後を見据えたSASA調査問題の在り方や形態・内容の研究開発

V 終わりに

学力調査に対する教員の意識を変える“きっかけ”を担い、学校現場での学力調査の活用が“あたりまえ”になるような支援の継続

福井らしさの継承と発展

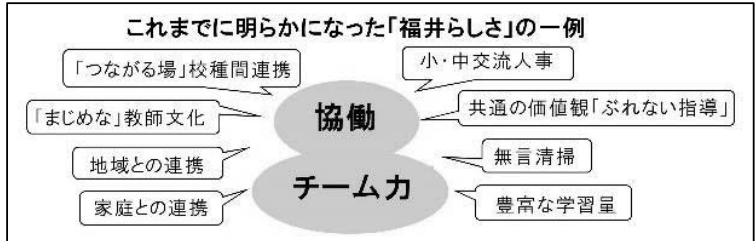
— 県外派遣教員がみた福井県の教育力 —

教科研究センター 小中学校教科研究課 学力向上グループ

これまでの県外派遣教員による研究

県外派遣教員研修の目的

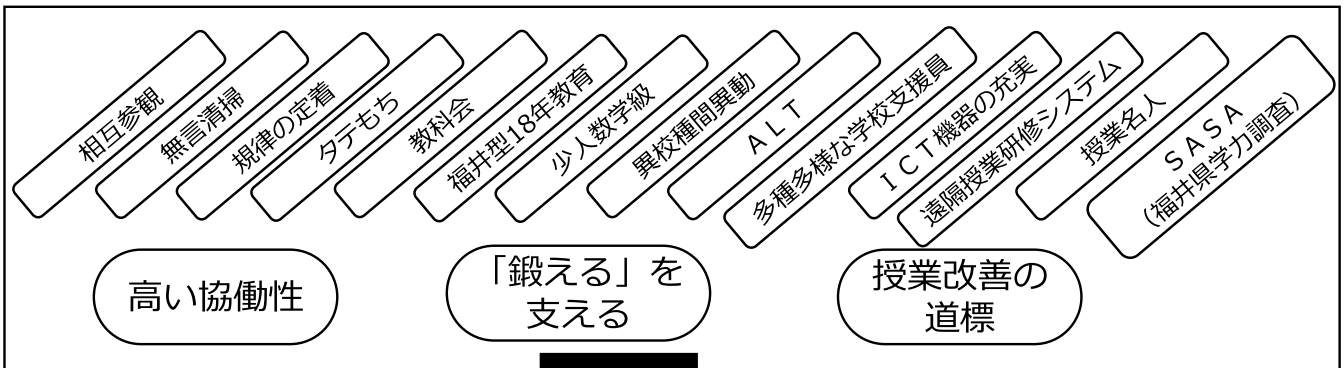
- 福井県の公立小中学校教員として勤務しながら、福井県の公立小中学校における学力向上に向けた実践的な指導法を経験すること、および多様な校外研修を通して、幅広い知識・技能等を身に付け、指導力の向上を図る
- 他県の教員と交流することで、福井県教員の資質向上を図るとともに、研修後に、派遣元の都道府県教育の発展に資する



『県外から来た教師だからわかった福井県の教育力の秘密』 (福井らしさを探る会編著、2015.12 学研教育みらい)

平成26年度～平成29年度は自主研究会として活動
「福井らしさを探る会」 (通称：らし研)
アドバイザー：国立教育政策研究所千々布敏弥総括研究官

H30年度の研究から見た福井の教育の強みと課題



測りやすい学力

- 知識
- (狭義の)技能

従順 知識伝達 統一性

バランス

学びの主体性

アクティブラーニング



学力向上

測りにくい学力

- 論述力
- 批判的思考力
- 学習意欲
- 学習計画力
- コミュニケーション力 など
- 討論力
- 問題解決力
- 知的好奇心
- 学習方法
- 追求力

児童・生徒の主体性を育む授業改善

単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、児童・生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていく ⇒ **意図的な単元構想**

【授業改善の視点】

- 子どもと単元の目標を共有し、ゴールをイメージさせる
- 学習課題に対して目的や必要性を感じさせる
- 思考を伴った協働的な課題解決をさせる
- 自分の学びや変容を自覚させる
- 学習の終わりに新しい疑問や興味関心をもたせる

学力と相互に関連する特別活動の充実

特別活動を通じたよりよい生活や人間関係づくりは、受容的な雰囲気や学校生活への目標を達成しようとする意欲や態度を醸成し学力と相互に関連している

【主体的に学ぶ態度を育てる】

- 自己決定の場を与える学級活動
- 自発的、自治的な児童・生徒会活動
- 感動を味わう学校行事
- 異年齢集団で追求するクラブ活動

生徒の語彙や表現を豊かにする研究
 —やり取りを通しての語彙指導と
 『「コーパス」を活用した中学生のための英語表現集（増補版）』の作成を通して—
 教科研究センター 小中学校教科研究課 英語教育グループ

平成29年度 英語教育グループの研究

- ・「CAN-DOチェックシート」を作成し、中学校3年間の到達目標を意識しながら生徒が定期的に自己評価をして課題を明確にし、先生も自己評価表の結果を受けて授業改善に繋げるという研究
- ・研究協力校の生徒が書いた英作文を基にした例文や「基礎英語LEAD」から抽出した過去のNHK「基礎英語」で実際に放送した英文等に、CAN-DO指標とコーパスによる頻度情報を付加して、テーマ・トピック別に集約した表現集『「コーパス」を活用した中学校のための英語表現集』を発刊

平成30年度 生徒の語彙や表現を豊かにする研究

H30年度に向けて
の方向性

- ・H26年度からCAN-DOに関する研究を続けてきたが、生徒の表現力に課題が見られるという現状を踏まえ、指導改善に直結した研究を行う。
- ・「表現集」には、福井の生徒が実際に話したい、書きたいという表現や、福井に関するキーワードや表現をもっと掲載する必要がある。生徒の興味をより喚起し、実際の表現活動に役立たせるものに改良する。

(1) 英語でのやり取りによる語彙獲得に関する研究

研究の目的	新出語句導入時に、英語でのやり取りを通してその語句の実際の活用状況を提示しながら生徒のインプットやアウトプットを増やすことによる語彙習得の変容を調査。
研究協力校における実践・検証	2つの研究仮説を基に、あわら市内の研究協力校(1校)の習熟度別の標準クラスで実践 仮説1 やり取りを用いて導入した新出語句は、やり取りを用いないで導入した新出語句と比べてより大きい割合で受容語彙から発信語彙に変化し、長い期間定着する。 仮説2 リーディングをする際、効果的な語注を付けた新出語句は、語注を付けなかった新出語句と比べて長い期間定着する。
成果と課題	(成果) 英語でのやり取りを用いて導入した新出語句はそうでない場合と比べて、受容・発信語彙としてより多く、長い期間定着し、やり取りの効果が見られた。 (課題) 学習直後に見られた語注の効果は2カ月後には見られず、効果的な復習のありかたについて研究する必要がある。

(2) 『「コーパス」を活用した中学生のための英語表現集（増補版）』の発刊

5大特徴

- ①『グリフィス博士の初級用英語教科書「ファーストリーダー」』の一部を収録
- ②『For Your Vocabulary Building ②福井の特産品や福井を象徴するキーワード』を加筆
- ③『For Your Vocabulary Building ③「ふるさと福井の先人100人」から』より15人の偉人の業績を収録
- ④NHK語学番組『エンジョイ・シンプル・イングリッシュ』のコンテンツから「落語」に関する表現を収録



- ⑤あわら市内の研究協力校(1校)にH29年度版「表現集」の授業での活用と、活用後のアンケート調査協力を依頼。アンケートの結果を「表現集(増補版)」の例文や表現に反映

H31年度に向けて
の方向性

- ・「Focus on Form」や「CLIL(内容言語統合型学習)」アプローチの研究
- ・『「コーパス」を活用した中学生のための英語表現集(増補版)』の活用方法を研修講座等で周知し、授業や補習等での活用を促進

先生と児童のやり取りを意識した言語活動

—英語絵本を活用して—

教科研究センター 小中学校教科研究課 英語教育グループ

平成29年度 外国語活動の授業における英語絵本の活用法の研究

英語専科でない先生でも 負担を重くすることなく、外国語活動の授業 をコミュニケーションの場にするための一つの手段として、英語絵本の効果的な活用法を検討した。

成果

担任の先生が授業で英語を使用するきっかけになった。

絵本が外国語活動の授業をコミュニケーションの場にする一つの手段になった。

児童が、絵を手がかりにして、英語が分かる実感をもつことができた。

平成30年度 言語活動を生み出す英語絵本の活用法の研究

研究の目的

「実際に英語を用いて違いの考えや気持ちを伝え合う」言語活動を生み出すための、英語絵本の効果的な活用法を探る。

研究協力校
における
実践・検証

- ・ 研究員が英語での自然なやり取りが生まれるような英語絵本の読み聞かせの指導案を作成し、それをもとに、担任の先生と実践前に打ち合わせを行う。
- ・ 担任の先生による授業実践を行う。研究員が授業の様子を観察・記録し、やり取りが生まれる英語絵本の活用法を検証する。

福井市内
小学校
1校
4年生
1クラス

授業で絵本を活用したことによる成果

児童の変容

様々な英語に触れ、英語力が向上した。

先生の英語での問いかけに対して、英語で返答できるようになってきた。

英語でやり取りすることに、慣れ親しむことができた。

先生の変容

やり取りが生まれる英語の表現を選んで読み聞かせができるようになった。

児童の日本語のつぶやきを拾い、英語に直してインプットができるようになった。

児童の興味関心を引く読み聞かせの工夫ができるようになった。

授業で英語絵本を活用する際の課題

英語絵本の読み聞かせを継続的に行っていくための環境づくり

英語絵本を活用した実践例の発信

先生の英語力向上

次年度へ向けて

・英語絵本の研究を福井県の先生方へ発信

・小学校外国語科の言語活動中心の授業作りや学習評価の在り方の研究

新しい大学入試を突破する力を育てる学力向上策の研究

—新学習指導要領が求める学力の育成—

教科研究センター 高校教科研究課

高校生学習状況調査 平成24年度～

目的：高校生の学習状況を把握し、今後の生徒指導に活用

対象：全日制・定時制の
全県立高校生

実施時期：6/25～7/13 1回

〈高校生学習状況調査からみえる
高校生の現状〉

- 将来の夢や目標を持っている生徒は7割以上
- 地域・社会の問題や出来事に関心のある生徒は7割以上
- 授業が「分かりやすい」と答える生徒は年々増加
→各学校における授業改善が進んできたことのあらわれ

福井県到達度確認テスト 平成28年度～

目的：生徒の学習到達度を測定し、定着が不十分な箇所を明確にし、効率的に学力向上をすすめるために有用な情報を提供

対象：県立普通科系高校 1年生・2年生全員

〈平成28～30年度実施状況〉

名称	実施時期	解答方式	教科・科目
1年	H30 1月	マーク式 国語、数学の一部は記述式	国語、数学Ⅰ、英語
	H29 1月	マーク式	
	H28 1月	マーク式	
2年①	H30 9月	マーク式	国語、数学Ⅰ・数学ⅠA、英語
	H28 7月	マーク式	
2年②	H30 1月	マーク式	国語、数学Ⅰ・数学ⅠA、数学Ⅱ、英語、 世界史B、日本史B、地理B、 物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎(H30より実施)、 物理、化学、生物
	H29 1月	マーク式	
	H28 1月	マーク式	
3年	H30 実施なし		文系：国語、数学(文系)、英語 理系：数学(理系)、英語、物理、化学
	H29 8月	記述式	
	H28 8月	記述式	

平成30年度は、「大学入学共通テスト」の開始学年となる1年生の国語・数学の一部に、記述式を導入

〈複数年度間の課題比較〉

教科	H28 1年(1月)の課題	教科	H29 1年(1月)→H30 2年①(9月)の継続課題
国語	● 論理展開を俯瞰的に捉える読解力 ● 基礎知識の定着	国語	● 筆者の主張を把握する力 ● 基礎知識の定着
数学	● 式変形の手順に対する理解 ● 定理の理解と応用	数学	● 2次関数をグラフ化したものを考察する力 ● 必要十分・十分条件の理解と活用
英語	● 正しい発音、アクセントの定着 ● 文法・語法に対する知識と理解 ● 文法や情報を整理し、吟味する力	英語	● 正しい発音、アクセントの定着 ● まとまりのある英文の理解

〈共通する課題〉

- [国語]
 - ・主張の把握
 - ・基礎知識
- [数学]
 - ・定理の理解と応用
- [英語]
 - ・正しい発音、アクセント

「課題の共有」「3年間を見通した指導計画」「授業改善」が鍵！

大学入試改革の現状

学力の三要素（知識・技能、思考力・判断力・表現力等、主体性）を多面的・総合的に評価する入試へ転換

➡ 大学入試共通テスト

【国語・数学】記述式問題を導入（2024年度～地歴公民、理科でも導入検討）

【英語】4技能評価、外部検定試験の活用

➡ 大学入試共通テスト試行調査（プレテスト）

…… 問題作成の三つの方向性を踏まえ、学びの過程を重視する作問

➡ 個別選抜

…… 新たなルール設定（推薦・AO入試拡大、面接・調査書の活用等）

〈今後、期待されること〉

- ・新『高等学校学習指導要領』の趣旨、高大接続改革、大学入試改革の流れを踏まえ指導すること
- ・改善傾向はみられるものの、スピード感を持って、今後も授業改善に取り組むこと
- ・課題を共有し、その克服に向け、PDCAサイクルを継続的・計画的に機能させること

➡ 新しい時代に必要となる資質・能力をバランス良く育成し、学力向上へ！

地方創生を担う人材をはぐくむ教育の在り方

－主権者教育、ふるさと教育の充実に向けて－

教科研究センター 新教育課題研究課

I 主権者教育

- 1 新科目「公共」の目標と内容
 - ・高等学校学習指導要領「公共」
 - ・「公共」で働かせる見方・考え方
- 2 主権者教育WG会議
 - (1)第1回主権者教育WG会議
 - ・研究活動の概要
 - ・研究アドバイザーによる講義
 - (2)第2回主権者教育WG会議
 - ・研究アドバイザーによる講義
 - ・教材づくりの方向性を検討
 - (3)第3回主権者教育WG会議
 - ・教材（案）を検討
 - (4)主権者教育に係る公開授業・授業研究会
 - ・研究協力員による授業実践（公開授業）
 - ・授業研究会
- 3 主権者教育WG会議の成果と課題
 - (1)成果
 - ①公共で働かせる「見方・考え方」の側面から
 - ②主権者教育WG会議の側面から
 - (2)課題
 - 主体的・対話的で深い学びの側面から

II ふるさと教育

- 1 福井県が目指すふるさと教育
- 2 ふるさと教育WG会議
 - (1)情報収集に向けて
 - ①第1回若手教員と産業界との交流会
 - ・研究活動の概要
 - ②第2回若手教員と産業界との交流会
 - ・企業紹介、工場見学
 - ③第3回若手教員と産業界との交流会
 - ・大学教員による講演
 - ④第4回若手教員と産業界との交流会
 - ・企業経営者による講演
 - (2)教材作成に向けて
 - ①第1回ふるさと教育WG会議
 - ②第2回ふるさと教育WG会議
 - ③第3回ふるさと教育WG会議
- 3 ふるさと教育WG会議の成果と課題
 - (1)教材作成の側面
 - (2)外部との連携の側面

III おわりに

- 地方創生を担う人材育成を目指した教材開発（主権者教育、ふるさと教育）
- 社会に開かれた教育課程
 - ・外部との連携（情報収集、教材作成）
 - （情報収集）
主権者教育：大学や法曹界等の専門家 ふるさと教育：企業経営者やNPO等
 - （教材作成）
様々な高校に勤務する教員や外部人材等との協働を通じた教材作成の意義

プロジェクターを活用した高校数学における授業改善の取組み —生徒の主体性を育み、深い学びを実現する授業を目指して—

教科研究センター

H29年度の成果と課題

成果

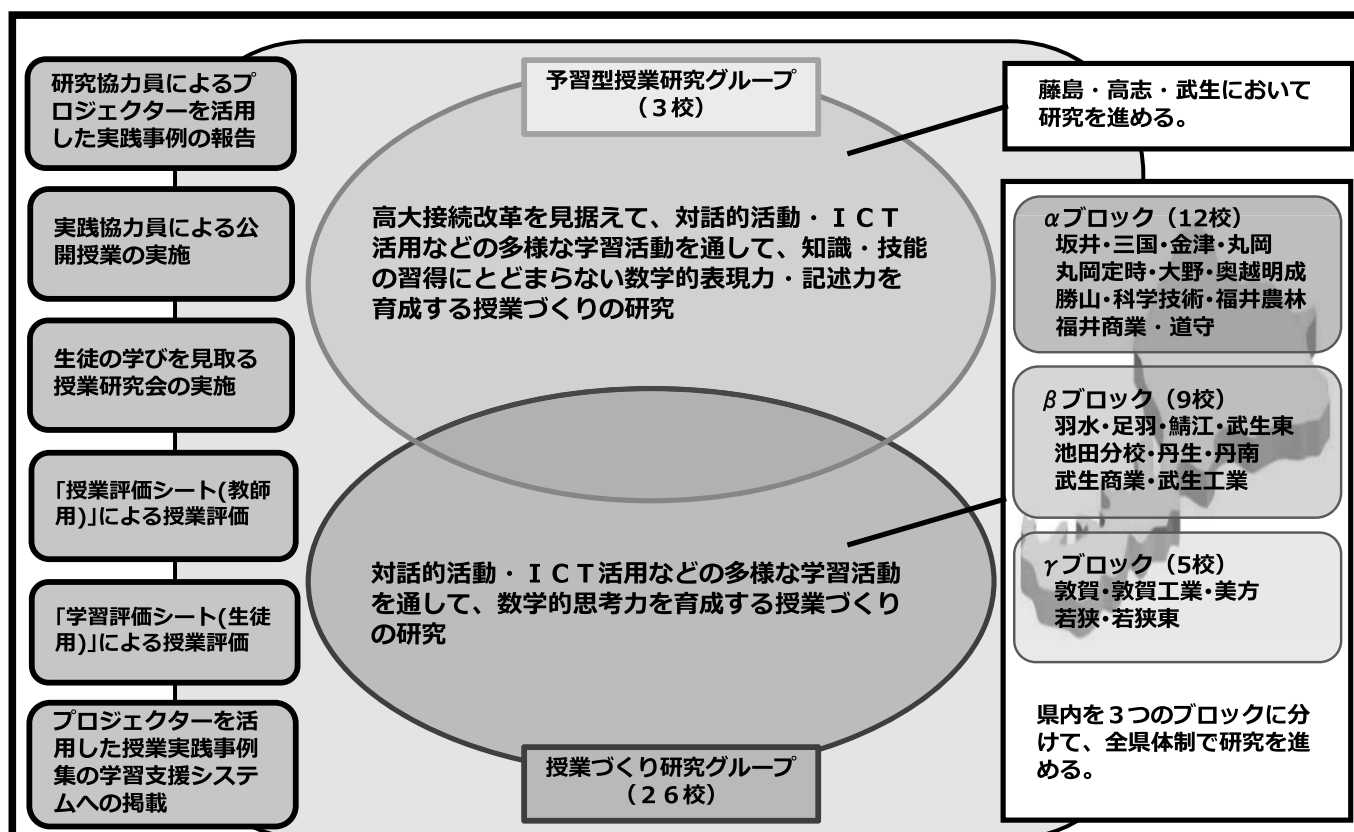
- (1) 数学教員が授業を公開し合い、授業研究をすることにより、授業改善に対する意識改革が進んだ。
- (2) 実践協力員への授業訪問を実施し、参考にすべき指導上のポイントを授業動画として発信した。
- (3) 「授業評価シート（教師用）」と「学習評価シート（生徒用）」を学習支援システムに掲載した。

課題

- (1) 授業づくりサイクルで、授業をつくり上げていく際に、対話的な学習活動やICTを活用した学習活動を取り入れるという観点で十分ではなかった。
- (2) 「授業評価シート（教師用）」と「学習評価シート（生徒用）」の活用が十分ではなかった。

H30年度の取組み

研究グループ・ブロックの体制は、H29年度の体制を引き継ぐ



- プロジェクター（ICT）を活用して深い学びを実現する授業をつくり上げる
- 授業評価シート（教師用）・学習評価シート（生徒用）の活用による授業の振り返り

授業づくり活動の拡充

実践協力員

学習指導案を立案し、その学習指導案を教育総合研究所と検討協議して、授業を実践する研究協力員のこと

授業づくりサイクル

「実践協力員による学習指導案の立案→学習指導案の検討と協議→実践協力員による授業→授業評価・学習評価シートで授業を振り返り検証し、次の学習指導案を立案する」サイクルのこと

プロジェクターを活用した授業実践事例集

研究協力員が実践したプロジェクターを活用した授業を基に事例集にまとめたもの

複数組織の連携協働による事業推進

—先端教育研究センターの事業概括を通じた連携協働の意義と着眼点—

先端教育研究センター

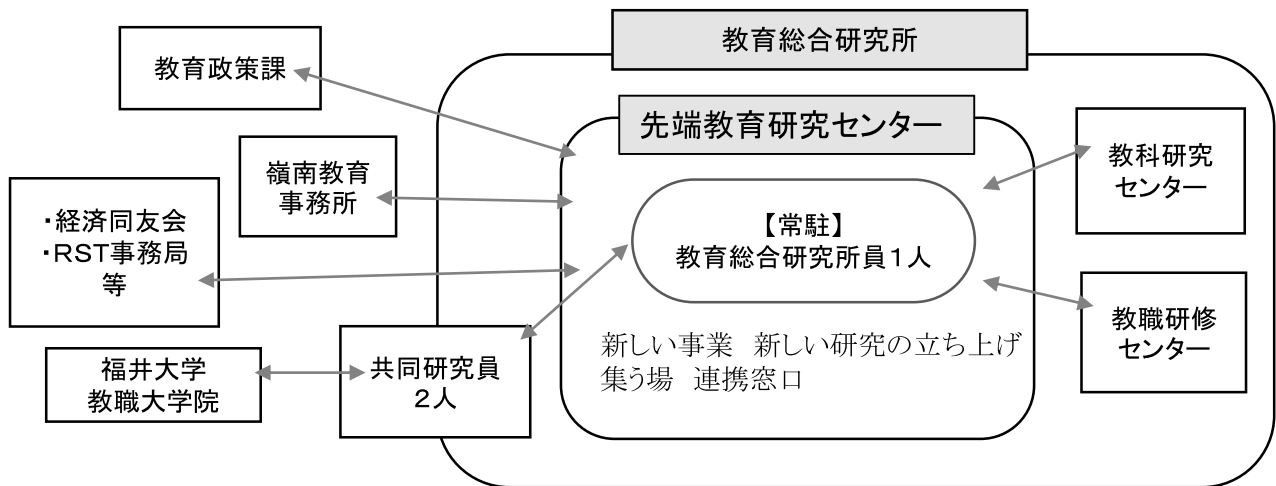
I 複数組織の連携協働の必要性

中央教育審議会答申に見る視点

学校と地域の連携・協働 目標やビジョンの共有 学校教育と社会教育の連携
組織的に諸課題に対応 教育委員会と大学等の関係機関との連携・協働 ……

II 先端教育研究センターの関わる連携協働の実態

先端教育研究センターの組織と連携協働



連携協働の
意義と効果
(1年目のまとめ)

主な平成30年度の研究、事業

教員免許状
更新講習

RSTの受検
を通じた基礎
的な読む力の
研究

教員志望者
セミナー

経済同友
会との
交流事業

III 複数組織の連携協働の意義

「創造」「効率」
「拡がり」「楽しさ」

IV 複数組織の連携協働時における いくつかの着眼点

目的の共有 メール 遠隔会議 名刺
書類とデータの管理 チェックシステム

V これからの先端教育研究センターのあり方

- 新たな研究課題の発掘、新たな事業の検討
- 各種事業の母体、連絡調整窓口の機能
- 大学との連携協働のあり方の再検討
- 連携協働の意義の検討と発信